小学校１年生活科

「それゆけ！はなみずきたんけんたい！」(全26時間)

授業者　酒谷　明子

実践のポイント

この実践は，入学当初の不安解消のための学校探検からスタートし，探検を繰り返す中で知りたいことややってみたいことを見つけ，自主的に課題をもって臨む学校探検へと進化させていったものです。そのために，「はなみずきノート」（生活科ノート）に個人的な気付きを記し，それをもとに気付きを交流します。交流してわかったことをもとに，「はなみずき地図」（大地図）を完成させたり，気付いたことやわかったことをクイズにしたり，「ひみつクイズ大会」を開いたりしました。一連の活動を行いながら，個の気付きを関係付けながら質的にも高めていくことができることができました。

発達段階を踏まえ，活動の際には情報の共有化のために写真を多用し，様々な場面で視覚的にわかりやすくする支援をしました。

授業のねらいと展開

本実践は，学校に愛着をもち，学校生活に思いや願いをもって生活することができるようになることをねらいとして行いました。そのためには，学校の施設やその施設が設置されている場所，学校生活を支えてくれる職員や一緒に生活する友達のことがわかることが大切です。さらに，楽しく安心して学校生活を送ることできるようになっていることで，このねらいは十分に達成できると考え，次のような展開で授業を進めました。

① 学校探検で友達とサイン交換したり先生方から名刺をもらったりする（写真１）
② 学校の地図作り（写真２）や，ひみつクイズ大会をする
③ 調べたり，インタビューしたりしてわかったことを友達と交流する（写真３）

これにより，子供たちの思いや願いが単元を通したストーリーになり，以下の資質・能力が育まれると考えました。

- 友達の意見と自分の意見を比較したり，分類したり，関連付けたり，視点を変えたりして対象を捉える力
- 自分の思いや願いを伝えたり，友達と交流したり，活動を振り返ったりして表現する力

はなみずきノートにサイン交換（写真1）

みんなではなみずき地図（大地図）を作る（写真2）

先生方へのインタビュー（写真3）

実践のここに注目！

視点１：学びの文脈のある単元を構成する

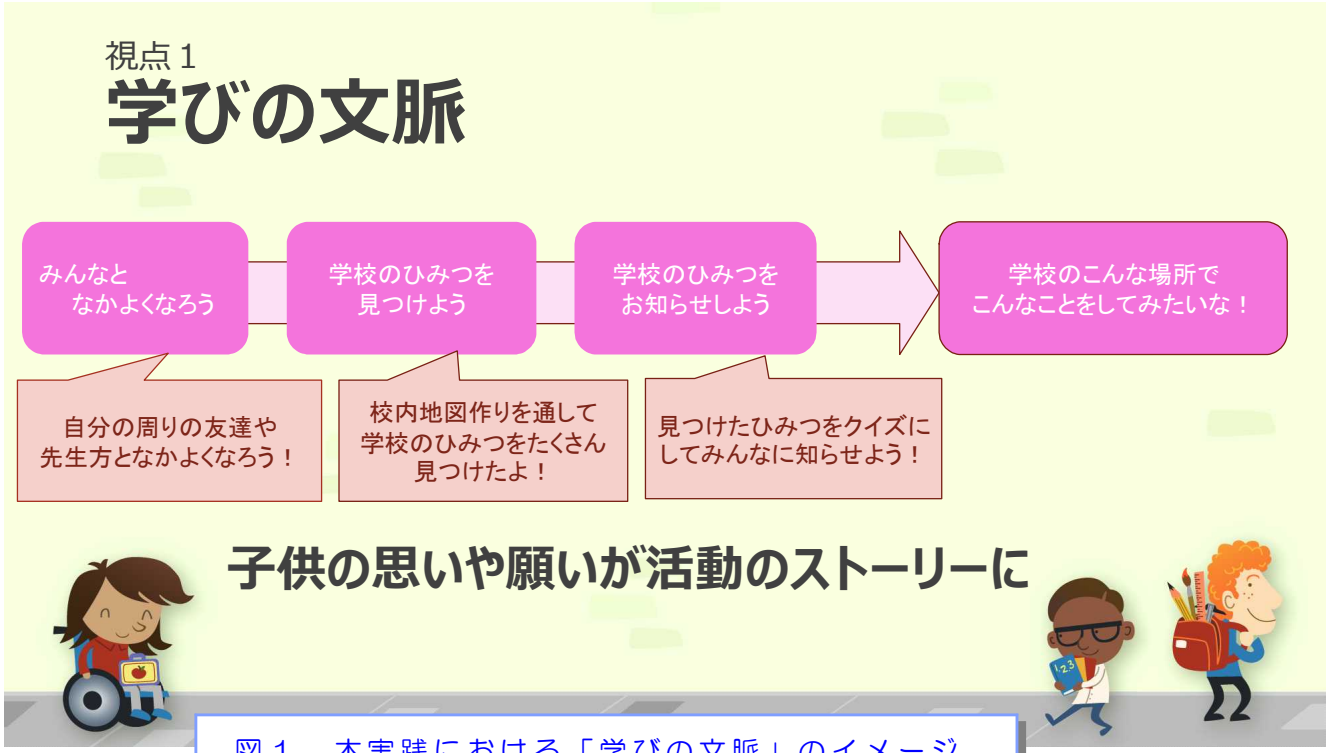


図１　本実践における「学びの文脈」のイメージ

子供が学びの連続性，必要性，関連性を自覚しながら学ぶことができるように学びの文脈のある単元を構成します。

特に生活科では，活動や体験の後に生まれた子供の「思いや願い」が次時の活動の課題となるような単元のストーリー作りをしていきます。子供の「思いや願い」が生かされた次時の活動は，子供たちにとって必要感のあるものとなり，必要感があるからこそ，子供たちは活動に没頭していきます。（図１）

単元の導入では，入学当初の学校探検を終え「もっとみんなとなかよくなりたい」という子供達の思いから，「みんなとなかよくなろう」という課題を設定します。はじめに友達とじゃんけんをして，勝った人が負けた人の「はなみずきノート」（生活科ノート）にサインを書くというゲームをします。「１年生みんなのサインを集めたら６８こ」という具体的な数字を出すと，「全部集めたい！」という意欲が高まりました。ある程度サインを集めると，今度は「先生方からもサインをもらいたい！」という声がたくさん聞こえるようになりました。そこで，「先生方ともなかよくなろう！」と学校中の先生方にサインをもらうために出かけることになりました。これをきっかけとして，先生方から名刺をもらいながら，自然と学校の施設や場所，職員への気付きが生まれる，レベルアップした学校探検がスタートします。

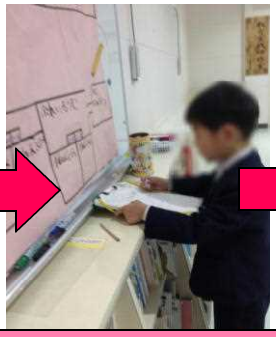
みんなとサイン交換

先生方から名刺をもらう活動

たくさんの先生方から名刺をもらうために学校中を探検していくと，「学校はとても広いね。」「いろんな場所がたくさんあるね。」「何をするところだろう。」という思いが出てきました。そこから，「学校のことを調べて，地図にしたい！」という課題が設定されました。

地図はみんなで調べたことが１つの「はなみずき地図（大地図）」に表せるようにします。白地図に，子供達が調べてきたことを書き込む形式にするのがポイントです。子供達は，大地図と同じ白地図に探検でわかったことや気付いたことを書き込んでいき，毎時間の活動の終わりにわかったことを交流して大地図に書き入れ，「はなみずき地図」が少しずつ完成していくように支援していきます。この活動では，探検でわからないことがあっ時には，近くの先生方にインタビューして疑問を解決するよう促しました。ここで名刺をもらった時の関わりが生かされることになります。

地図を完成させるための探検



わかったことを地図に記入

みんなで大地図を完成させる

地図が完成し，白地図が全て埋まっても，わからないことがたくさんあることに子供たちは気付きます。それが「学校のひみつ」なのだと定義付けました。

そこで，ひみつを解決するための探検がスタートすることになります。毎時間のたくさんの探検の終わりには，わかったことや気付いたことを「はなみずきノート」（生活科ノート）に記入するのがここでのポイントです。このひみつを教えたくてたまらなくなる子供たちの気持ちの高まりから，「はなみずきノート」（生活科ノート）に記された「ひみつ」をクイズにして「ひみつクイズ大会」を行うように導きます。お互いの解決できたひみつをクイズにし，気付きの質を高めることがねらいです。「ひみつクイズ大会」をオリエンテーリング形式にして，ひみつのある場所に全員が向かい，場所や人を確かめることができるように仕組むことで，繰り返し関わりながら気付きの質を高めていくことができるようにします。

ひみつを解決するための探検

グループでひみつクイズ作り

みんなでひみつクイズ大会

単元終末には，「はなみずきたんけんたい」の歩みを振り返り，たくさんのひみつを解決できた達成感を分かち合ったり，友達と力を合わせたからたくさんのことがわかったことを価値付け合ったり，学校の中でどこが自分のお気に入りなのか話し合ったりする活動をします。この活動をすることによって，子供たちはこれからの学校生活に自信と意欲を

もって生活することができるようになると考えます。

視点２：必要感のある協同的な学び

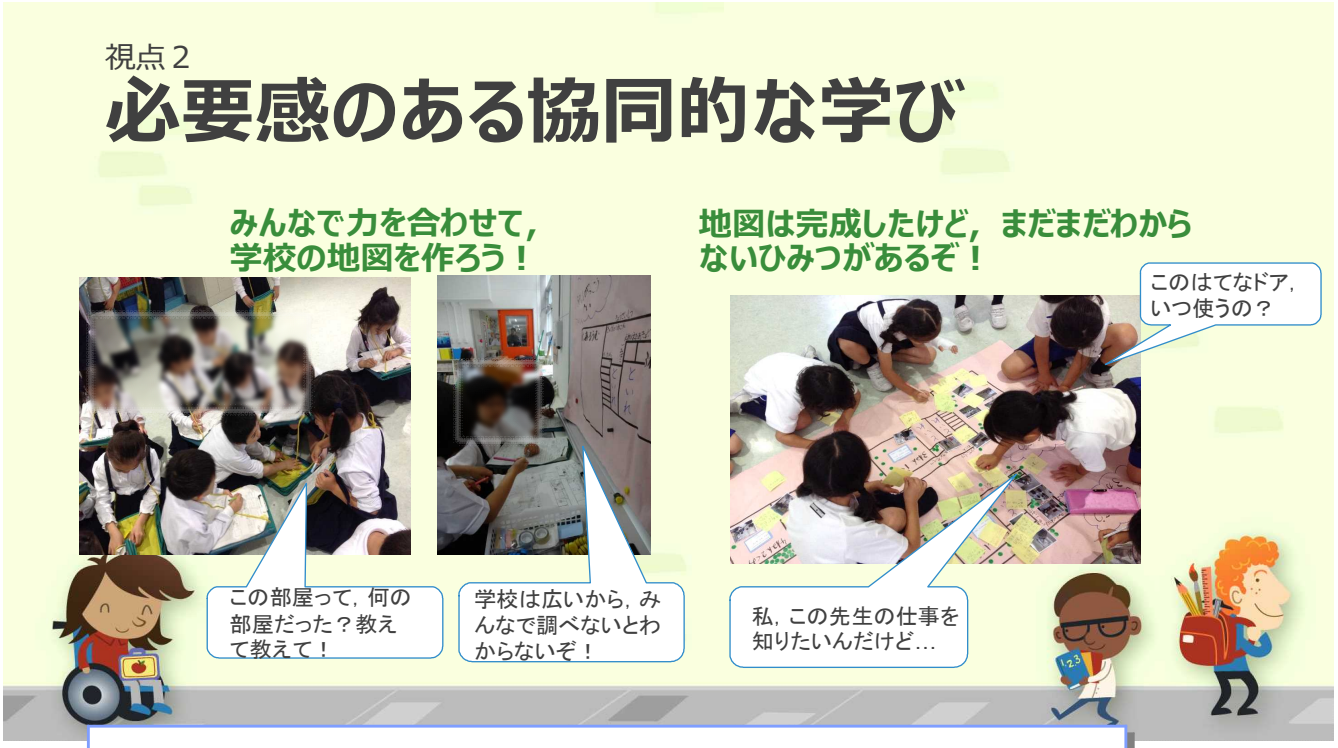
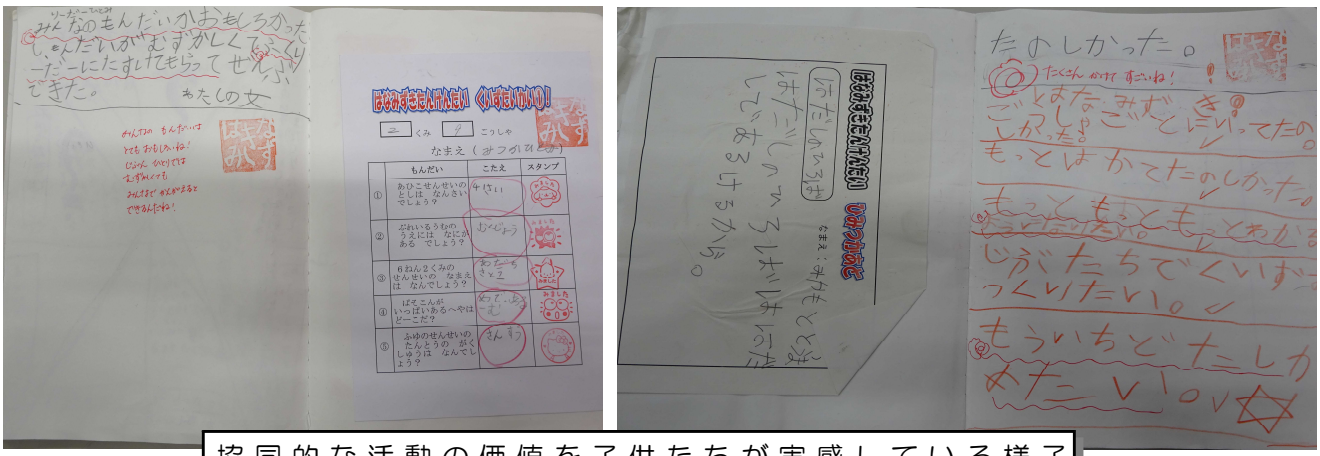


図２　本実践における「必要感のある協同的な学び」のイメージ

① 自分が探検してわかったことをもとに，みんなで「はなみずき地図（大地図）」作りをするという，友達と一緒に力を合わせなければできないことを設定します。

② まだよくわからないことに視点を絞って探検を繰り返した結果，グループのメンバーだけが共有する「ひみつ」をカードに表し，オリエンテーリング形式のクイズ大会をすることで，情報を伝え合うことができるような相互補完型の協同的な学びができるようにします。

③ 自分たちが情報を集めてできた「はなみずき地図」や活動の様子を見ながら，わからないことを知るため，先生方にインタビューする活動を位置づけます。（図２）



協同的な活動の価値を子供たちが実感している様子

その結果，子供たちは，グループでわかったことを教え合うと自分一人ではわからなかったことがわかるようになることに気付くようになりました。協同的な活動のよさを感じ

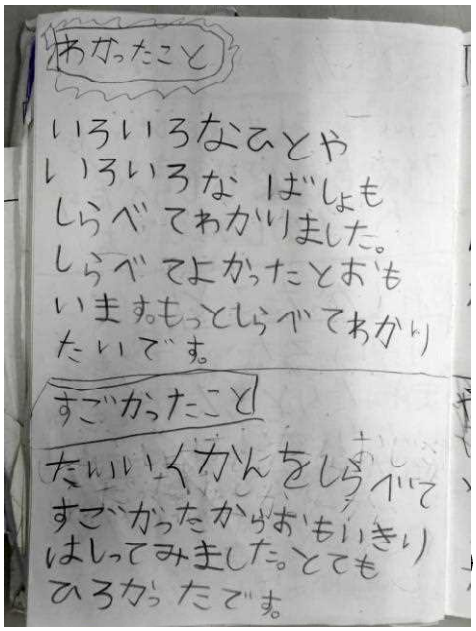
たことにより，「協力すればできるかも！」という思いをもつ様子が見られるようになりました。

また，課題に合わせてどの先生にインタビューすればよいかを，話し合うこともできるようになりました。

視点３：目的に応じた弾力的な振り返り

図３　本実践における「目的に応じた弾力的な振り返り」のイメージ

毎時間の学習を振り返ることができるよう，「はなみずきノート」（生活科ノート）を活用します。表現方法については絵でも文でも可とし，子供の気付きや疑問，学習の感想を次時に生かせるようにします。



また活動を終えて，子供たちから出た気付きや疑問を焦点化し，学級全体で共有したことを，次時の課題をとしました。そのために，毎時間の終末に子供の学習感想を交流する場を設定し，自分の学びを確実に振り返ることを大切にしました。振り返りを行う時には，その視点を明確にしたり，次時につながる気付きを紹介したりします。写真などの画像を活用することも有効でした。

その結果，「今日は〇〇室に行ったけど，よくわからないことがあったから，明日も行ってみよう！」「〇〇ちゃんが言ってたこと，本当かどうか確かめに行きたい！」「今度は〇〇先生に聞きに行かないと！」などという声が毎時間の振り返りで自然と聞こえるようになりました。また，毎時間繰り返していくことで，その日の振り返りの視点を自分た

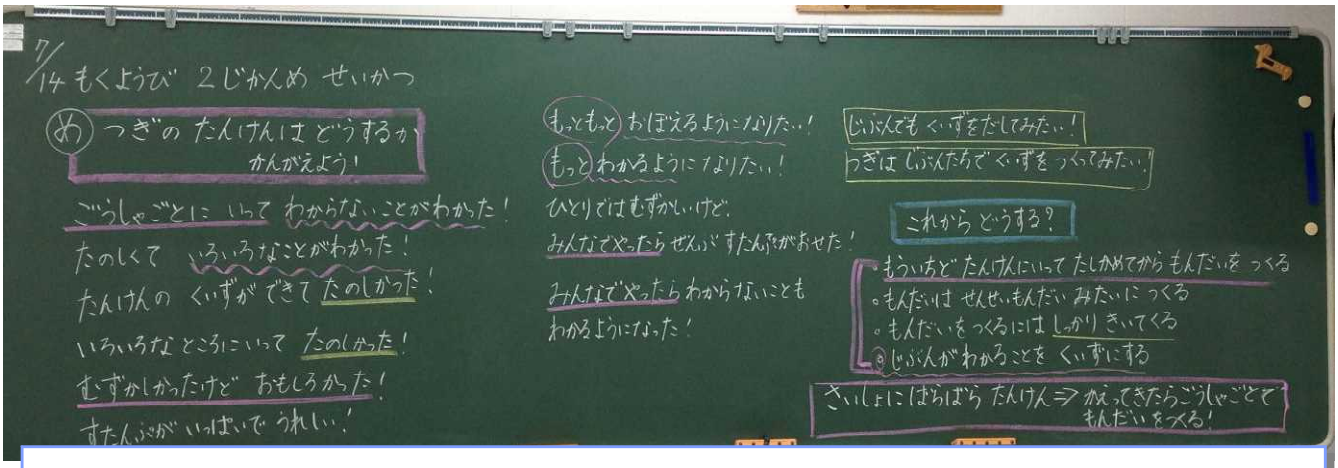
ちで話し合って決めることができるようになりました。

授業者からのコメント

生活科という教科は，すべての活動が「子供の思いや願い」からスタートします。その思いや願いがストーリーとなっていくのが生活科におけるアクティブ・ラーニングだと私は考えています。しかし，活動のすべてを子供任せにするわけにはいきません。教師の意図（単元計画）と子供の思いや願いがぴったりフィットし，そこに距離ができてしまわないように単元の活動が進められなければならないのです。では，どうしたらいいのでしょうか。

振り返りから次時の課題を作る

私は今回の実践で，一貫して「振り返りから次時の課題を作る」ことを実践してきました。本時の学習活動を振り返る時には，必ず子供の思いや願いが生まれます。その思いや願いを交流することで，「次はこうしたい！」という子供たちみんなに共通の課題が型づけられていくのです。



教師主催の「ひみつクイズ大会」の振り返りから，次時の課題を設定する授業の板書

振り返りを充実させるための手立て

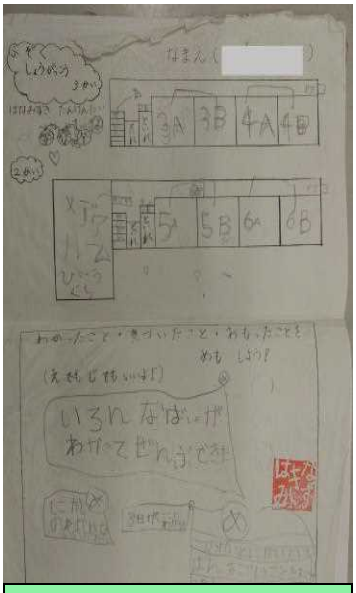
子供一人一人の自分の思いや願いを伝えたり，友達と交流したり，活動を振り返ったりして表現する力（生活科の資質・能力）を育成するためには，振り返りを充実させることも大切です。子供一人一人の振り返りが充実するためには，活動の時間を十分に保障するなどの環境整備を整えることがとても重要です。そこで，実際に行った実践を紹介します。

一貫したはなみずきノート（学校探検生活科ノート）の使用

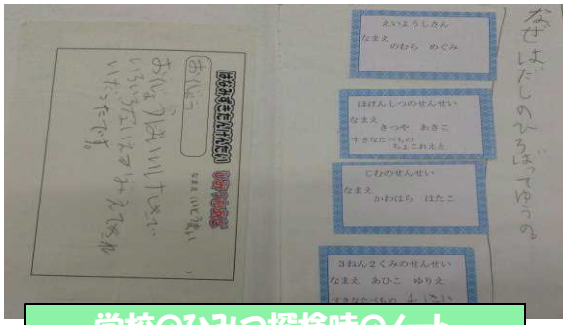
今回の実践では，子ども一人一人の振り返りを充実させるための手立てとして，単元導入から終末まで一貫して「はなみずきノート」（生活科ノート）にわかったこと・気付いたこと・思ったことを記入することを進めてきました。その日の活動について，自分の振り返りを確実にノートに表出しておくことで，グループや全体で行う振り返りの際に，自分の考えをもって臨むことができるようにするためです。全員がそれぞれの振り返りをはっきりさせてから交流することで，次時の課題を全体で見い出すことができるようになります。

ノートの使用の実態ですが，子供はその日の学習活動の終わりに必ずその日の活動の振

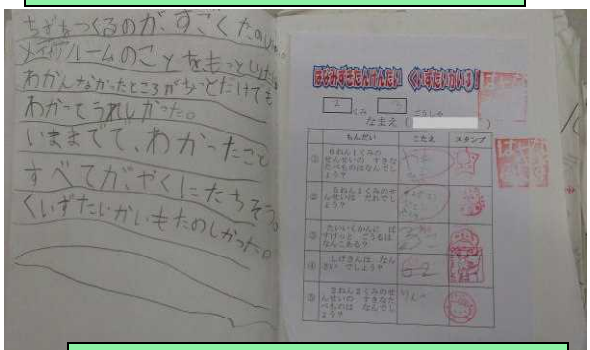
り返りを絵または文字に表していきました。ノートに罫線はなく，カードや地図，名刺を貼ったり，思いや気付きを絵や文字で表しても可としたことで，表現に制限がかかることなく，子供たちは自由に思いや願いを表現していくことができました。



校内地図作りの時のノート



学校のひみつ探検時のノート

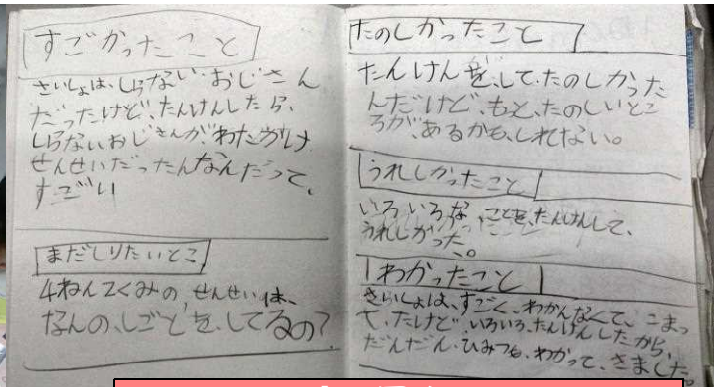


ひみつクイズ大会のノート

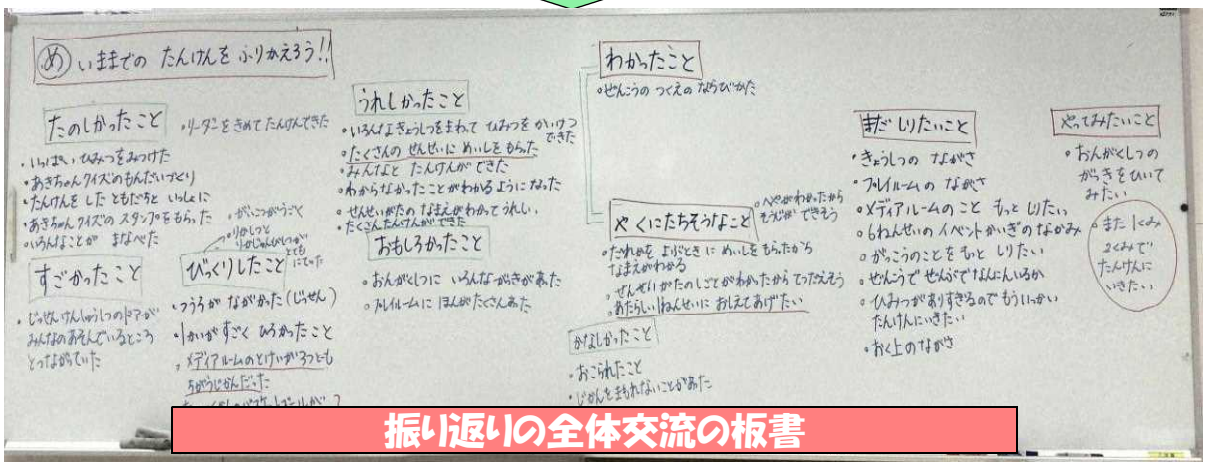
振り返りの記入がスムーズにできるようになると，全体での振り返りの交流が活発になってきました。また，振り返りをノートに記入することを繰り返していくと，今までは教師が提示してきた「振り返りの視点」を子供たち自身が考えて交流することができるようになりました。

この実践の終末に「はなみずきたんけんたい」の歩みを振り返る，最後の振り返りの視点は，すべて子供達から出てきたものです。

今までの学校探検を友達と一緒に振り返る



この時の個人のノート



振り返りの全体交流の板書

この実践でわかったことは，生活科で大切にされている「活動⇒表現⇒活動⇒表現⇒活動」という流れに，「活動⇒表現⇒振り返り⇒活動⇒表現⇒振り返り…」のように振り返りを組み入れていくことが大切であることです。

これにより，子供一人一人の思いや願いがしっかりと表出されることが実感できました。表出されたものを交流していくことで，一人一人の思いや願い＝気付きが自覚化され，次の課題が明確になっていく様子もみることができました。この活動は，生活科の資質・能力である「友達の意見と自分の意見を比較したり，分類したり，関連づけたり，視点を変えたりして対象を捉える力」の育成にもつながったと考えます。

1 年生のうちから，ポートフォリオのよさを生かしたノートを作ることができるということもわかってきました。個の気付きが質的に高まっていく様子は，子供達の「はなみずきノート」を見るとよくわかります。単元終末の「学校探検すべての振り返り」では，「はなみずきノート」がそのままポートフォリオになっているので，ほとんどの子供が自主的にノートを見ながら振り返りを進めていく様子が見られました。

また，協同して作成した「はなみずき大地図」を見ることによって，友達と活動してきたことへの価値付けもすることができました。

課題と今後の生活科について

今回の実践を通して，いくつかの課題も明確になりました。まず一つ目は、単元導入前に立てた指導計画通りに実際の活動が進むことはとても難しいということです。「子供の思いや願いをストーリーにする」ためには，時間がないからといって子供の思いを途中で途切れさせるわけにはいきません。しかし，体験や活動を通して子供が得た思いや願いは，こちらの予想したものでないものも多々あり，その度に指導計画の練り直しが求められます。限られた時数の中で，「より効果的な活動」＝「子供たちの思いや願いに沿った活動」としていくことができるか，常に考えていくことが必要です。本実践の中でも，すべての子供の思いや願いに沿った活動となったのだろうかと疑問に感じる場面がありました。すべての子供の思いや願いに沿った活動とするためには，生活科で一番大切にされてきている「日々の見取り」を着実に積み重ねていくことが大切なのだと考えます。活動の中で教師と子供の対話や行動観察を大切にすることは言うまでもなく，子供個人の表出されたものに対して丁寧に教師が問いかけをしていくことで，子供一人一人の思いや願いを確実に見取ることができると考えます。本実践でいうと，「はなみずきノート」（生活科ノート）の中に表されていることを毎時間見取り，教師自身も振り返りをして次時の課題になりそうな思いや願いを把握していくことが必要なのだと思います。

二つ目は，学校探検がスタート・カリキュラムの中で完結してしまいがちだということです。その理由として，探検の際に子供たちを野放しにしてしまうのではないかという懸念や，先生方や職員との関わりで十分な共通理解が得られないことがあるなどがあると考えられます。

今回の私の実践でも，自分の課題をもった子供た

ちがそれぞれの課題解決のために学校探検をする際には，友達同士のトラブルや他学年への配慮などで課題がありました。単元計画を立てる際には，教師が見通しをしっかりもって「全体探検」をする時間，「ばらばら探検」をする時間，「グループ探検」を仕組む時間，など意図的に計画を立て，その時に子供たちに何を意識させるかを事前にしっかりと考えておくことが必要だと考えます。

また，学校探検への共通理解を得るために，全職員に学校探検の目的やその時その時の子供たちの課題を伝え，十分に協力してもらえるように話をする場を設定していくことが大切だと思います。現在どの学校でもスタート・カリキュラムを進めることになっていると思いますが，全職員がしっかり理解しているかというと疑問があるのではないかと私は思います。次期学習指導要領では，これまで以上に幼小の円滑な接続が重要視されるといわれています。幼児期の学びの特性を踏まえながら小学校教育へ円滑につないでいくためのカリキュラム・マネジメントという視点を踏まえて，改めて生活科を中心とした取組をうながしていくことが必要だと考えます。今後はスタート・カリキュラムを全職員で確認していくことがより重要になってくるでしょう。

これからの生活科では，資質・能力を育成する学びの過程がより大切にされます。子供の思いや願いをいかに具現化し，体験や活動につなげていくか，気付きを伝えたり交流したり振り返ったりする表現活動をどのように充実させていくか，支援の在り方について様々な実践を通して考えていきたいと思います。

【引用・参考文献】初等教育資料 2016　12 月号　No．947